

福島の現在 大口玲子

東日本大震災から三年半がたつたが、福島第一原発の事故により拡散した放射性物質をめぐる問題はなかなか解決の見通しが立たない。除染で出た土や汚泥などは袋に詰められ、今は次々に仮置き場に置かれているが、さらに中間貯蔵施設に集められて最終処分をすることになる。中間貯蔵施設の建設について、九月一日、福島県知事が「苦渋の決断」として県内で受け入れることを表明した。

・大鳥よその美しき帆翔を見上げずには汚泥を運ぶ

・「高線量」声響きつつ春泥も汚泥も袋に詰められて臭う

九月に刊行された齋藤芳生の第二歌集『湖水の南』冒頭の二首である。作者が育ったのは、福島県福島市の渡利地区。福島市の都市部と阿武隈川をはさんで向き合う所で、主に住宅地として発展してきた地区だが、福島市内でも線量が特に高くていわゆる「ホットスポット」といわれるようになった地区である。「汚泥」を運んだり袋に詰めたりといふのは、単に津波の後始末というのではなく、除染作業と読むべきだろう。「大鳥」は、阿武隈川に飛来する白鳥だろうか。翼を大きく広げたまま風に乗って飛ぶ白鳥の姿は、作者にとってまずふるさとの自然を象徴するものであるはずだが、それよりなにより目の前の現実は「汚泥」なのである。また「汚泥」とともに、春の季語である「春泥」が袋に詰めら

れているという感覚は、ふるさとに変わらずにあり続けた季節の訪れや風土が、放射能汚染によって容赦なく損なわれてしまつたという現実から来るものだろう。この二首を含む冒頭の一連には「(一〇)、春」と書かれているが、ここで描かれている状況は渡利地区に今も続く現実である。震災後三年半がたつて刊行されたこの歌集が、東日本大震災前の日常から始まる編年体でもなく、逆年順でもなく、地震発生直後の緊迫した状況から始まるのでもなく、除染に苦しむ福島の現状で始まることに注目した。冒頭この二首で始まるのは、ふるさとの放射能汚染という現実が、作者にとつてもっとも切実で重要な問題であるということなのだろう。

・連翹の枝を捕すなり父祖の土地の放射線量を測るかわりにシヤベルも軍手もマスクも持たずふるさとに背を向けて働く私は

・福島の雪ではないがFRISKをがりがり囁んで初校をめぐる

・「アブダビよ、異邦人には握りの砂も渡すな」という王の遺言

・礼拝の声ふるさとになきことの明るさ暗さもて雪は降る

・祖父よ眼を閉じてもよいか烈風に煽られて針のようく雪来る

・「榮川」を祖父は好みき酒蔵に放射線量を測る人はや

歌集全体は、作者が育った福島の震災後の状況、東京で就職して働く作者の日常生活が描かれてゆく中で、かつて暮らしたアブダビでの思い出や祖父母の記憶を歌つた作品がところどころにはさまれているという構成である。時間や場所を行ったり来たりするようで少し混乱したが、東京、アブダビという作者が確かに生活した土地の記憶、祖父母の記憶に照らされることによつて、福島の現在が鮮明に表現されていることを強く感じた。